
[成果情報名] イチゴ‘あまおう’の普通期作型における安定生産のための基肥量

[要約] イチゴ‘あまおう’は、普通期作型でも基肥量が多すぎると頂果房頂果の果形が乱れ、第1次腋果房の収穫が遅れる傾向にある。頂果房の果形の乱れが少なく、高収量のための基肥窒素量は、とよのか専用肥料で8～12kg/10a、あまおう専用肥料で16kg/10a程度が適当である。

[キーワード] イチゴ、あまおう、基肥、普通期作型、乱形果

[担当部署] 筑後分場・野菜チーム

[連絡先] 0944-32-1029

[対象作物] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

福岡県オリジナルイチゴ品種‘あまおう’の普通期作型では、第1次腋果房の花芽分化の遅れやばらつきは比較的少ないが、頂果房で果形が乱れやすく高収量のための適正な基肥量が明らかでない。

そこで、普通期作型における高品質、高収量のための最適基肥量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. ‘あまおう’の普通期作型では、とよのか専用肥料で基肥窒素を8～16kg/10aで施用すると、基肥量が多いほど頂果房の収穫開始がやや早くなり、頂果の果重が重くなる傾向にあるが、16kg/10a施用では頂果の果形の乱れが甚だしく、頂果房と第1次腋果房間の出葉数が増加して第1次腋果房の収穫が遅れる(表1)。

2. とよのか専用肥料を使用する場合、基肥窒素8～16kg/10a施用で2月までの収量および総収量に差がないので、8～12kg/10a程度施用が適当である。(図1)。

3. あまおう専用肥料で基肥窒素12kgおよび16kg/10a施用すると、とよのか専用肥料の基肥窒素12kg/10aと比べ頂果房の収穫開始および頂果における販売できない乱形果の発生、頂果房と第1次腋果房間の出葉数、第1次腋果房の収穫開始および2月までの収量に差がないが、12kg/10aの施用では年内収量および総収量が低下するため、16kg/10aの施用が適当である(表2、図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. ‘あまおう’の普通期作型における基肥施用量の指標として活用できる。

2. 本試験の基肥施用前のECは0.2dS/m程度であった。また、追肥は、マルチ被覆直前に10a当たり窒素成分でとよのか専用肥料を4kg、スーパーロング140タイプを5kg施用した。

[具体的データ]

表1 とよのか専用肥料による基肥量の違いと果房毎の出蕾、収穫状況

基肥 窒素量	頂果房頂果				内葉数 (枚)	第1次腋果房頂果	
	出蕾日	収穫日	平均果重	乱形率(うち鶏冠果)		出蕾日	収穫日
8kg	11月 5日	12月24日	41.6gb	15% (0%)	3.5b	12月 4日	2月17日
12kg	11月 2日	12月22日	46.7ga	50% (0%)	3.7b	12月 4日	2月18日
16kg	11月 1日	12月20日	52.5ga	45% (15%)	5.2a	12月10日	2月24日

- 注) 1. 普通促成栽培、2002年9月24日定植。
 2. 出蕾日および収穫日は、平均日。
 3. 鶏冠果は、右写真のように果形の乱れが甚だしい果実。
 4. 内葉数は、頂果房と第1次腋果房間の出葉数。
 5. 異なる英文字間には5%水準で有意差があることを示す。



表2 あまおう専用肥料による基肥量の違いと果房毎の出蕾、収穫状況

肥料の 種類	基肥 窒素量	頂果房頂果			内葉数 (枚)	第1次腋果房頂果	
		出蕾日	収穫日	乱形率(うち鶏冠果)		出蕾日	収穫日
あまおう専用	12kg	11月 5日	12月20日	35% (5%)	3.1	12月 4日	2月16日
	16kg	11月 2日	12月18日	40% (5%)	3.1	12月 4日	2月16日
とよのか専用	12kg	11月 2日	12月18日	25% (5%)	3.4	12月 5日	2月19日

- 注) 1. 普通促成栽培、2003年9月28日定植。
 2. 出蕾日および収穫日は、平均日。
 3. 鶏冠果は、右上写真のように果形の乱れが甚だしい果実。
 4. 内葉数は、頂果房と第1次腋果房間の出葉数。

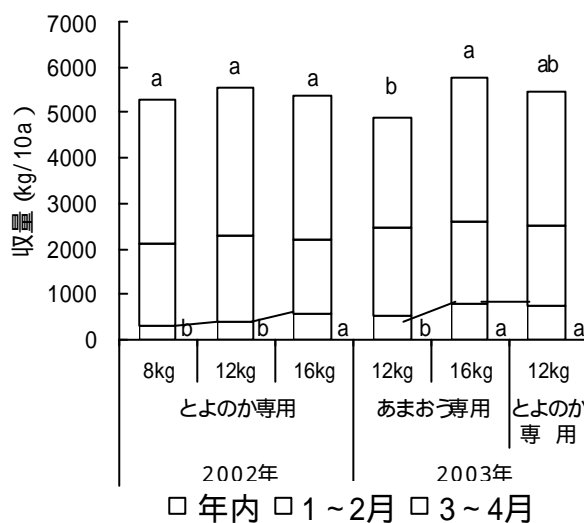


図1 肥料の種類および施用量と収量の関係

- 注) 1. 横軸は基肥窒素量。
 2. 同一年度内における異なる英文字間には5%水準で有意差があることを示す (FisherのPLSD法)。

[その他]

研究課題名：筑後地域における「あまおう」の安定生産技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成16年度 (平成15~16年)

研究担当者：水上宏二、小田原孝治、兼子 明